

第238回くらしの植物苑観察会 2019年1月26日(土)

幕末プロイセン使節団のクリスマスツリー探し -江戸の最初のドイツ風降誕祭-

福岡 万里子(当館歴史研究系 准教授)

幕末、1860(万延元)年9月にドイツ諸国と日本の修好通商条約締結のため来日した北ドイツのプロイセン王国派遣の使節団は、当初、難なく終わるものとみていた幕府との条約交渉が長引き、滞在先の江戸の赤羽根外国人接遇所において、その年のクリスマスから年越しの時期を過ごすこととなった。使節団を構成していた陣容には、外交使節団員5名を含む文官メンバー17名に、随行するプロイセン軍艦の将校・水夫らが大量いた。彼らはどのようにして、その時期を過ごしたのだろうか。

彼らの旅行記をひもとくと、難航する幕府との条約交渉で苦勞する使節団長オイレンブルク伯爵を励まし喜ばそうと、使節団員らが奮ってクリスマスの準備に精を出し、聖夜から降誕祭にかけて盛大な宴を赤羽根接遇所で催したことが分かる。クリスマス・ツリーは、使節団員が江戸中を探し回って、ドイツのモミの木(Tannenbaum)に似た木が探し出され、ツリーの装飾も室内装飾も全てが、当時の江戸近辺において調達できた植物や花卉、果物、その他の自然素材から、趣向を凝らした手作りがなされた。

それは、曲折が続いていた長丁場の条約交渉や、その後に江戸の外交公使団を揺るがすことになる米国公使館書記兼通訳ヒュースケンの襲撃殺害事件など、度重なる緊張の中であって、ひとときの息抜きを彼らに提供したことであろう。またそれは、日本国内で行われたドイツ風降誕祭としてはおそらく史上初めてのものであったし、幕末の条約の締結以前はタブーであったはずのキリスト教の宗教行為が、外国公使館内とはいえ、国内で大がかりに開催された、極めて初期の事例であったと思われる。

本講演では、使節団の「クリスマス実行委員」らがおそらく訪問したとみられる江戸の植木屋街や、探し出したクリスマス用の樹木がどのようなものだったのかなどを、各種の資料をひもときながら考えつつ、江戸の最初のドイツ風降誕祭の様子をのぞいてみることにしたい。



プロイセン使節団の一行

.....

次回予告 第239回くらしの植物苑観察会 2019年2月23日(土)

「くらしの中に息づく植物」天野 誠(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要